

安祥城

1 どんな城だったか

お城というと、わたしたちは大阪城や名古屋城のような、大きな石垣やそびえたつ天守閣をおもいうかべます。しかしそれは世の中が安定してきた江戸時代ごろの城で、戦いにあけくれる戦国時代の城は、すこしよすがちがいます。戦うためにつごうのよい場所、とくに山や川にかこまれた、せめられにくい場所がえらばれ、石垣も天守閣もありませんでした。ところが、鉄砲がつつわってくると戦いの方がかわり、城は山の上ばかりではなく、平地にもつくられるようになりました。安祥城も、そういう戦国時代の戦いのための「とりで」だったのです。

安祥城のようすをみてみましょう。安祥城は「平山城」です。安城が原の東のはしで、台地が北から南へ馬の背のようにのびた、そのはしにつくられました。東・南・西の三方向は、たてば腰までしずんでしまう沼(深田)だったので、自然の要塞といえました。

本丸は55m四方、二の丸は35m四方の正方形で、まわりには2重の濠(おほり)がめぐらされ、その土で内がわに、高さ2mくらいの土塁(土のかべ)がきずかれています。土塁の上には見はりやぐらがあって、矢作川の低地をずっとみわたすことができました。また、その土塁にかこまれた中には、武士の館があり、いつでも戦える状態の武士がたくさんいました。



2 安祥城のはじまり

安祥城は、1440年ごろ(室町時代のはじめころ、およそ600年前)、和田親平という人がきずいた、とつたえられています。和田氏は、代々この地方をおさめていた幕府の地頭です。関東に永享の乱がおこったとき、今までのすんでいた館(これが安城古城です、名鉄南安城駅の南の社口堂あたり)をとりこわし、東500mのところになんか新しく城をつくって、そこにうつりました。これが、安祥城のはじまりだといわれています。

3 松平氏の城になる

そのころは応仁の乱をさかいに、室町幕府の力がよわくなり、全国の大名家は自分の領地をひろげようと、各地ではげしい戦いをくりひろげていました。三河では、松平氏が、岩津(岡崎市の北部)からだんだん領地をひろげ、西三河の平野部へ進出してきました。また、尾張では、織田氏が清洲城(名古屋市の西部)を中心に勢力をひろげ、一方、駿河(静岡県)では、今川氏がいて、それぞれ自分の領地をひろげようとしていました。

松平氏は、豊田の松平町にすんでた武士で、領地は山の中にもありましたが、15世紀には、室町幕府の役人とむすんで、たいへん力のつよい武士になりました。岡崎には、守護代になった西郷氏がいて、勢力をふるっていたので、まず岩津を自分のものにする、岡崎をさけ、安城への進出をねらっていました。

松平信光(徳川家康の6代前の人)は、安祥城は守るのにやすく、せめるのにむずかしいということをしていたので、計略をつかいました。それは次のようです。

1471年、信光は、安城から1~2Kmはなれた西野(新田町あたり)で、盆踊りをおこないました。つづみやかねをならし、きれいな着物をきた若者をはでにおどらせたので、それをきいた安祥城の武士たちは、みな見物にでかけてしまいました。城にのこったのは、戦う力のない老人や病人や婦女子ばかりで、信光はこのすきに城を占領した、ということです。

安祥城を自分のものにした松平氏は、それから清康(家康のおじいさん 3代前)が岡崎にうつるまでの50年間、この城を本拠地にしていました。そのあいだに、三河の武士たちをつぎつぎに自分の家来にしていきました。安祥城時代に、松平氏の家臣になったものは「安城譜代」といって、江戸時代には幕府の有力な武士になりました。

さて、三河全体の支配をねらっていた松平氏には、安祥城は、西のはずれすぎました。清康は東の方へ勢力をのぼすために、1524年、もっと地形のよい 岡崎へ本拠をうつしました。そして安祥城の守りを広忠(清康の子 家康の父)の家臣、松平長家にまかせました。そのころの松平氏はまだまだよわく、つよい勢力をもった織田氏と今川氏のあいだにはさまれた、いつせめほろぼされるかわからない、苦しい状態でした。しかも安祥城は、織田氏と松平氏の領土の接するあたりにあったので、いつ戦いがおこるかわからなくなりました。



4 安祥城をめぐる合戦

1540年(500年前)、織田信秀(織田信長の父)は、三河を自分の領地にしようとせめこんできました。安祥城は、3000の兵でとりかこまれ、松平方はよく戦いましたが、50人以上の家臣が戦死しました。そして1544年の戦いで、とうとう安祥城は、織田方のものになってしまいました。

それからは、松平方が城をとりもどそうとする戦いがくりひろげられました。1545年、松平広忠(家康の父)は、本多忠豊をせんとうに安祥城にせめこみました。しかし、はさみうちにあつて、広忠は命からがら岡崎へにげる、というありさまでした。このとき、本多忠豊は広忠の身代わりとなって、戦死してしまいました。



こうして、安祥城は織田氏の城となっていました。こんどは織田氏がいきなり岡崎までせめてくるらしい、というわさがひろがりました。もはや広忠の力ではどうにもなりません。広忠は、今川氏に応援をたのみました。しかし、たしかに味方になった、というあかしに、人質をさしださなければなりません。このときの人質が、竹千代（当時6才の徳川家康）でした。ところが竹千代は、今川氏のいる駿河（静岡県）におくられるとちゅう、田原の戸田氏にとらえられ、反対に尾張の織田信秀の人質にされてしまいました。

そうしているうちに、1549年、広忠は家臣に暗殺されてしまいました。松平氏と同盟をむすんでいた今川氏は、このすきに織田氏がせめこんでくるのではないかとおそれ、いち早く岡崎城に家臣をおき、安祥城を攻撃しました。

まず、3月には山崎城をおとし、安祥城をとりかこんで、本丸までせまりました。半年後の10月には、今川勢のはげしい攻撃に、安祥城はついに落城してしまいました。そして、安祥城を守っていた織田信広（信秀の子、信長の兄）はとらえられ、織田方の人質となっていた竹千代と交換されました。

このような安祥城をめぐるおおきな戦いは、ぜんぶで5回あったといわれ、これらの安城合戦で死んだ武士たちを葬った塚が、いまでも安祥城のちかくにいくつものこっています。

5 安祥城の廃城

その後、1560年に桶狭間の戦いで、今川氏が織田氏にほろぼされると、このとき今川氏の家来になっていた徳川家康（名を松平から徳川にあらためました）は、独立して、やっと岡崎にもどることができました。そして、織田信長と徳川家康は、おたがいの領地をおかさない、という同盟をむすんで、いらなくなった安祥城をとりこわしました（1562年）。安祥城がつくられてから、123年後のことでした。城あとには、江戸時代に、浄土宗の了雲院がたてられ、現在にいたっています。



また、この了雲院と八幡社のあいだにある安祥城跡公園は、歴史公園として整備され、平成3年には、了雲院の西側に歴史博物館と野外ステージがつけられました。